

平成 29 年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

- 1 教養を高めるとともに社会規範にのっとり確かな判断ができ、自立できる若者の育成を図る。
- 2 現代社会における農業の意義や役割についての理解をもとに技能や科学的な知識を習得させるとともに専門性を高め、正しい勤労観や誠実な態度、創造性を身につけた社会に貢献できる若者および人間性豊かな若者の育成を図る。
- 3 生徒、保護者から信頼され、地域社会から必要とされる学校をめざす。
- 4 すべての教職員及び生徒があらゆる人と、ともに学びともに生きる社会づくりをめざす。

2 中期的目標

- 1 確かな学力の育成と定着
 - (1) 普通教科（英語、数学、国語など）の基礎的な学習内容の定着を図るとともに、専門教科においては課題解決能力の育成を図り、高度な専門技術、知識習得へつなげていく。
 - ア 基礎学力の定着、充実
 - 1 年次に自主教材を使用し、上級学年で必要となる実験に取り組むための基礎的な内容を修得させる。普通教科の基礎部分（中学校までの復習含む）は、各教科の授業内で継続的に指導を行う。
 - * 1 年次の普通教科（特に英語、数学、国語）に関する苦手意識をなくす。外部基礎学力調査の進路指導への活用。
 - イ 農業に関する専門的知識向上のための授業改善
 - 各科、各コースで育てたい生徒像を明確にし、その実現のために必要なカリキュラムの開発、授業方法、普通教科や他の教科との連携を行う。
 - 特に課題研究や農業クラブ活動で課題解決能力の育成を図る。また、研究授業を開催し、教員の専門技術の交流、継承を図る。
 - * 研究授業の実施及び授業見学週間の設定と多くの教員の参加。H31 年度には普通教科教員の 5 割が研究授業を実施する。
- 2 キャリア教育の充実と進路実現
 - (1) 専門知識・技術を習得させ、それを生かした進路指導、進路実現をめざす。
 - ア 早い段階から進路についての意識づけを行う
 - 進路指導部、農場部及び科が連携し、生徒の進路指導方針（就職先、進学先など）を具体化する。
 - 3 年間の早い段階から、システム化された進路指導を行い、就職、進学希望者の確定を行う。
 - 就職希望者には、農業現場も含めた企業実習、見学を企画し望ましい勤労観・職業観を身につけさせる。
 - 進学希望者には、確実な学力を身につけさせるため、選択科目の改善などカリキュラムの編成を考えるとともに、論文、英語、数学、国語などの力を高めるための指導体制をつくる。
 - * 就職率 100%（関連産業への比率は高いほどよし）、国公立大学を始め関連大学等への進学者 毎年 5 名以上を達成する。
 - イ 開かれた学校づくりを通して生徒の社会人としての成長を図る
 - 施設、設備の整備、改修を進め、より快適な校内環境の実現をめざす。
 - 校地の整備を行い、めぐまれた校庭・農地等を地域に開放し、地域の住環境への貢献（定期的な販売実習、庭木の手入れ、公共施設の花装飾など）及び地域の人のふれあい（園芸講習会、技術指導など）により、生徒の心の成長やコミュニケーション力の強化を図る。
 - また、平成 27 年度 学校経営推進費事業により、実習で生産した農作物の販売や情報を発信するアンテナショップを有効に運営する。生産から販売までの 6 次産業化技術を体験させることにより、生徒の就職意欲や進学意識向上につなげる。
 - * 生徒主体の地域貢献活動の展開（全生徒の 30%以上の参加）。
 - ウ 農業クラブ、生徒会クラブの活性化
 - 農業科目とも大きく関連する農業クラブを更に活性化させることにより、生徒の知識、技術を向上させ、達成感を多く味あわせることにより科学的背景をもった、農業技術者としての成長を図る。また、関連分野を中心に各種資格の習得をめざす。生徒会クラブの加入者も増加させ人格形成を図る。H31 年度には加入率 50%をめざす。
 - * 各課題研究班、農業クラブは各種発表会、競技会などに 1 部門以上にエントリーする。
- 3 中途退学・不登校の減少への取組み
 - (1) 中学校、家庭とのより一層の連携を図る
 - ア 総務部を中心に中学校との連携を強化するとともに、体験入学や学校説明会などの更なる改善、充実を図り、不本意入学生徒を一人でも減らす。
 - 入学生徒に関しては少しでも多くの情報を中学校、家庭から早い段階で入手し、初期段階での指導に生かす。そのため、中学校訪問や懇談会などを企画する。
 - * 日頃からの中学校・家庭との連絡、協力体制の構築
 - * 中途退学者、他校への転出者数の減少 H31 年度には、合わせて 5 名以内をめざす。
 - (2) 教育相談体制のさらなる充実を図る
 - ア 外部団体との連携システムを構築するとともに教育相談委員長を中心とした教育相談委員会を強固なものにする。生徒の情報をこまめに収集し、的確に対応する。
 - * 生徒がいつでも相談できる相談員の常駐体制の構築
- 4 生徒の生活規律を正し、学ぶ環境を作り上げる。
 - (1) 学習に集中できる環境づくり及び自主的な授業態度改善を図る
 - ア 生活指導部と学年団が連携し、授業中の私語、机上の不要物禁止を更に徹底するとともに、生徒指導上の問題にきめ細かく対応する。現在行われている授業中注意 3 回制度を有効に生かし、全ての教員の取組みや授業が有意義に進行するようにする。また、そのためにも教室の美化をはじめ雰囲気づくりにも取り組む。
 - 日頃から生徒の礼儀（挨拶、言葉づかい、服装）について全教員で指導する。
 - * すべての授業が整然と行われ、勉学に活気のある教室にする。生徒アンケートを利用し、授業環境満足度を調査し、平均 80%以上にする。
 - (2) 校内組織の改善を行う
 - ア 学年団を更に有効に機能させる。すべての面で担任をサポートできるように、学年主任を中心に各分掌と連携をとれる体制をつくる。
 - * 学年団体制をさらに発展させ、学年団の中に主要分掌のミニ支所があり、各分掌と綿密に連絡をとれるようにする。
 - * 若手、中堅、ベテランが生徒指導のために、協力して職務を遂行する。
 - イ 古い体制を見直しつつ将来のあり方を常に検討する。
 - * 必要に応じて、校務検討委員会を設置し検討する。

【学校教育自己診断の結果と分析・学校協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析 [平成 29 年 12 月実施分]	学校協議会からの意見
<生徒> 8 割以上の満足度 ・特色のある学校 ・資格取得 ・実験設備 ・就職に有利 ・入学して良かった ・この科で良かった 7 割以上の満足度 ・楽しい ・先生は考えてくれる ・興味のある授業 ・あいさつ ・ 5 割以下の満足度 ・ボランティア活動 ・生徒会活動 <保護者> ほとんどの項目で評価が高かった。特に独自の教育活動は 9 割以上の高評価だった。 5 割以下の低評価はなし。	1 回目 6 月 3 日（土） ・本年度の学校経営計画について 特に意見無し ・学校教育自己診断について 中長期的な評価のためには、固定化された質問事項を設定し経年変化を見て行っ てはどうか。 ・HP の更新について 保護者は進学先を選ぶ参考に学校の HP を見る人が多いのでわかりやすい構成が 良い。 ・広報活動（学校 PR）について 学校の特色がわかりにくいので、見学や体験が必要である。その機会を可能な限り 増やしてはどうか。学校瓦版のようなものを教室掲示用として中学校に配布するの は効果が高いと思われる。

<p><教員> 8割以上の高評価 ・個に応じた指導 ・教育相談体制 ・地域連携 ・指導要録点検 7割以上の高評価 ・問題行動への対応 ・いじめ対応体制 ・進路指導 ・校長のリーダーシップ 5割以下の低評価 ・生徒会活動 ・校内人事 ・服務規律 ・研修報告 ・PCやAV機器活用 ・施設設備の長期計画</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・SSH事業について 特に意見無し ・その他 中学校の進路希望調査の段階で定員割れでは今後困難が予想される。学校での状況分析と対応が必要である。 地元商店街のHPと学校のHPのリンクなどを考えてみたら面白いかも。 <p>2回目 11月1日(水) 冒頭に委員による授業見学を実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業見学について 「研究基礎」の授業は、生徒に考えさせる授業で良かった。 ・学校教育自己診断について いじめに関する項目についての確認 ・広報(学校PR)について 中学校へ在校生の手書きメッセージを活動風景の写真を添えて送ってはどうか。同窓会としても協力する。(各支部でのポスター掲示など) <p>3回目 3月3日(土)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校経営計画の報告 学校教育自己診断結果について ここ10年間、あまり変化がないように感じる。5年間スパンで成果票を作成してはどうか。 実業高校の特徴を生かし、生徒の意欲を向上させる努力が必要。 日頃の学習で修得した内容を部活動で生かしてほしい。 地元商店街ではより積極的な関わりを求めている。 学校教育自己診断結果の値が低い項目についての詳細な検討が必要。 技術の伝承は大切。しかし、人事異動との絡みがあるので校長からの委員会への働きかけも必要。 園芸高校として、技術の特化をどう考えるかが大切。 マネジメント会社に学校経営に入ってもらいアドバイスを受けてはどうか。 ・SSH事業について 経過措置校になって予算規模が縮小になったが、今までの活動を支援するために企業との積極的な連携も視野に入れてはどうか。 生徒の研究活動や発表に関して同窓会とより綿密につながってはどうか。 ・進路結果について 就職希望者の1次試験合格率の伸び悩みについては、生徒の就職に関する意識の低さにも問題があるのではないかと。意欲を高める工夫を。 ・その他 委員からの意見 「ものづくり」はここにある。時代の流れはいい方向に向いているので乗り遅れないようにしてほしい。 生徒の学校教育自己診断結果の「入学して良かった」の値が高いのは大切なことである。うまく園芸高校をアピールできれば全ての課題が解決に向かうように感じる。 ・学校運営協議会についての説明と協力依頼
---	---

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
<p>1 確かな学力の育成と定着</p>	<p>(1) 普通教科(英語、数学、国語など)の基礎的な学習内容の定着を図るとともに、専門教科においては課題解決能力の育成を図り、高度な専門技術、知識習得へつなげていく。 ア 基礎学力の定着、充実 イ 農業に関する専門的知識向上のための授業改善</p>	<p>(1) ア・本年度から学校設定科目「研究基礎」を1年生全員に展開する。上級学年での研究活動に役立つ基礎的な内容を習得させる。 ・3年生は昨年同様1学期を中心に一般常識問題など就職対策に取り組ませる。 イ・授業見学週間、研究授業の体制づくりを引き続き行う。 専門教科で交流会を企画し、それぞれが持つ専門技術、知識の交流と継承を図る。</p>	<p>(1) ア・各単元の終了ごとに生徒アンケートを実施し生徒の変容をみる。 (生徒の研究に取り組む意欲、意識の変化が見られたか) ・就職希望者の1次内定率が向上できたか。 (H27・81.7% H28・86.6%) イ・研究授業の参加者延べ人数が60名以上 (H28・54名) ・専門教科交流会が実施できたか。</p>	<p>(1) ア・「研究基礎」は各科の1学年において、様々な授業が展開され、生徒の反応は良かった。アンケートの集計、分析は今後実施予定である。それを踏まえ次年度の展開方法などを検討する。(○) ・本年度は就職希望者が100名と例年より多く、指導には進路指導部を中心に時間を要した。1次試験内定率は84%と昨年度を上回ることはできなかった。筆記試験の得点力を向上させるために、1、2学年の早い段階からの取組みが必要である。(△) イ・初任者、ミドルリーダー、校長の授業見学時などに合わせ教員の他教員の授業見学の機会を設定したが、参加者の数は延べ50名程度にとどまった。授業力向上への教員の意識改革が今後も引き続き必要であろう。(△) ・先輩教員による若手教員への農業技術伝達を目的として技術伝承会を企画、実施することができた。7月に2回(造園、環境保全)12月に2回(酵母実験、接木)の内容で4名のベテラン教員が6名の若手教員に指導を行った。どの回も充実したものとなり、参加者のレポートからもその効果がはっきりと読み取れた。(◎)</p>

府立園芸高等学校

<p>2 キャリア教育の充実と進路実現</p>	<p>(1) 専門知識・技術を習得させ、それを生かした進路指導、進路実現をめざす ア 早い段階から進路についての意識づけを行う イ 開かれた学校づくりを通して生徒の社会人としての成長を図る ウ 農業クラブ、生徒会クラブの活性化</p>	<p>(1) ア・外部基礎学力調査を継続使用し、生徒の進路決定への一つの判断材料とする。若い担任が増えてくるので、このデータの利用法について勉強会を設定する。担任と課題研究担当実業科教員などが連携をとり、早い段階から生徒の進路実現に向け動きをとる。進学希望者へは普通教科を中心に補習体制をつくる。 ・自立支援コースの進路指導の体制づくりを行い、自立支援コース生徒の進路実現を模索する。 イ・校内販売所等を利用した定期的な販売実習、生徒、教員による緑化管理技術指導や講習会などの地域貢献を本年度も継続して実施することにより、本校の地域での役割を明確にするとともに生徒の社会性を伸ばす。本格始動した校内販売所の有効な運営体制について農場部を中心に具体的に運用を始める。 ウ・農業クラブと生徒会クラブへの生徒加入者数を増やす取り組みを計画し実施する。課題研究班や課外農業クラブ班は、各種競技会やコンクールなどに積極的に参加する。生徒会クラブ加入率を少しでも高め、生徒により学校に目を向けさせる。</p>	<p>(1) ア・外部基礎学力調査の有効利用の勉強会と検証ができたか。 ・普通教科の補習体制が機能できたか。 ・進路先未定者0。学校全体で就職先開拓、進学指導が昨年度以上できたか。 ・自立支援コース生徒の進路実現ができたか イ・例年通りの販売実習回数や地域貢献数が維持できたか。校内販売所が順調に機能したか。(H28 定期市、校外販売40回、地域貢献30件) ウ・プロジェクト、意見部門で大阪代表1以上。競技会やコンクールで優秀賞1部門以上。 ・クラブ活動活性化WGを組織させ、加入率を高められたか。(H28 農業クラブ 67.1% 生徒会クラブ 39.2%)</p>	<p>(1) ア・外部基礎学力調査を有効に使うために昨年度と同様に校内で担任向けの説明会を企画した。また、保護者や生徒との懇談でこのような部分で進路決定の1材料になることを進路部からも説明を行った。実際に生徒の進路決定に役立てた担任もいたが、まだまだ担任団すべてが有効活用しているとは言えない。このシステムが持つ多くのデータを生徒の進路に有効に利用できるよう今後も学年団と検討していく。(△) ・英語検定受験希望者への英語科による補習、漢字検定や論文指導への国語科の取り組みなど数は多くないが個別に実施されている。若手教員を中心に進学希望者を対象にした補習の実施が少しずつ増えてきた。(○) ・就職希望者が例年以上に多く、進路指導には多くの困難があったが、生徒の進路実現はほぼ達成した。(○) ・就職希望者増加と1次試験合格率向上のために2年次に一般常識対策を取り入れた。 イ・課題研究や総合実習、農業クラブ活動で地域との連携が例年通り行えた。大阪駅でのフラワーフェスティバルでの花壇制作、伊丹空港でのバタフライガーデン制作、近隣市開催の祭りイベントや農業祭への出店など例年通りの地域と密着した活動を実施できた。豊中市との連携を筆頭に生徒が指導役として活躍する活動も高い評価を受けた。(○) ① 販売実習・外部イベントでの販売実習に加えて日頃の授業内で野菜、果樹班の一輪車による校外販売など述べ40回を超える。(○) ② 地域貢献・例年通り、寄せ植え講習会(豊中市)、地域の公園管理、小学校との連携、園芸に関する相談対応、野菜部の収穫体験など多数の地域貢献が展開された。(○) ウ・農業クラブプロジェクト部門で大阪代表となり、近畿大会に出場できた。(○) 全国大会農業鑑定競技会で3名が優秀賞を受賞し、また測量競技の部で入賞を果たした。(◎) ピオトップ部が森林、林業研究発表大会で審査員賞など多くの競技会、発表会に積極的に参加し高い評価を受けた。(○) ・クラブ加入率(農業クラブはカウント法を変えたため低い値になっている) 農業クラブ 18% 生徒会クラブ 38.2% (△)</p>
<p>3 中途退学・不登校減少への取組</p>	<p>(1) 中学校、家庭とのより一層の連携を図る ア 総務部を中心に中学校との連携を強化するとともに、体験入学や学校説明会などの更なる改善、充実を図り、不本意入学生徒を一人でも減らす (2) 教育相談体制のさらなる充実を図る ア 外部団体との連携システムを構築するとともに教育相談委員長を中心とした教育相談委員会を強固なものにする。生徒の情報をこまめに収集し、的確に対応する。</p>	<p>(1) ア・体験入学や学校説明会の開催時期、回数、内容を地域中学校などの行事なども考慮にいれ、検討する。本年度は参加中学生に企画内容についてのアンケートを実施し次年度へつなげたい。 ・中学校へ高校側から働きかけ、出前授業などの回数、内容を強化する。 (2) ア・個別支援カードを有効に活用し、入学生に関する情報を早くからつかみ指導にあたる。入学後は保健室や相談委員会からの情報をもとに、担任、学年団とも連携をとり、不登校対策へ積極的に動ける組織にする。 ・きめ細かい指導を行い、早い段階から生徒のつまづきに気づき、相談、援助を行う。</p>	<p>(1) ア・昨年以上の計画ができたか。(内容、回数など) (H28 体験1回、学校説明会2回、ミニ学校説明会4回、中学校での説明会2校、出前授業1校) (2) ア・相談体制を充実させ、中退者や転学者の数を減らすことができたか。 (H28年度 退学 11名 転学 11名)</p>	<p>(1) ア・本年度は体験入学を午前、午後の2回開催としより丁寧に体験指導が行えた。学校での学校説明会8回、校外での学校説明会2回、中学校での説明会4校、出前授業1校、中学生対応2校など積極的に広報活動を実施した。HP更新も例年以上に積極的に行えた。(ブログ更新中心に)(◎) ・生徒の授業での活躍状況等を中学校に定期的な情報発信を行いたい。 (2) ア・教育相談部を中心に担任、学年団と連携を緊密にとりながら各生徒の実情に合わせた指導が行えた。(○) H30. 3月末現在 退学 4名 転学 15名</p>

府立園芸高等学校

<p>4 生徒の生活規律を正し、学ぶ環境を作り上げる。</p>	<p>(1) 学習の集中できる環境づくり及び自主的な授業態度改善 ア 生活指導部と学年団との連携 (2) 校内組織の改善 ア 学年団を有効に機能させる イ 将来構想</p>	<p>(1) ア・すべての授業で整然と授業が展開されるよう、教員が連携して雰囲気づくりと指導にあたる。実技科目を中心に生徒が自主的に取り組む授業風土をめざす。 (2) ア・学年団を更に機能性のある実行組織になるよう学校全体として取り組んでいく。特に、学年主任のあり方や分掌との連携方法について本校でのスタイルを確立する。本年度は学年団の中に相談部員を設定し、教育相談部との連絡調整に当たらせる。 イ・学校運営会議や校務検討委員会を機能させ、現存する体制の問題点を見つけ、現状に合ったものに変えていく。</p>	<p>(1) ア・授業に関する問題事象数は0に近づけたか。 ・生徒の自主的な授業が増えたか(授業見学などを通して確認する) イ・生徒会、農業クラブを中心に美化運動が展開できたか。 (2) ア・より良い学年団が構成できたか(昨年度と同様の教員へのアンケートを実施。昨年以上の評価を得たか。) イ・現状の課題を発掘し、改善策を出せたか。</p>	<p>1) ア・私語が多いなど授業規律改善のため、1クラスに全体指導と一部の生徒に個別指導を行い効果があった。式の場面では授業の大切さを毎回話すことができた。(○) イ・保健部員(生徒)が企画した美化週間を実施できた。担任にHR整備を訴え、例年より環境改善が進んだ。(○) (2) ア・学年主任との定期的な連絡会は設定できなかったが、事象対応には学年主任を通して行うという体制づくりはできた。(○) 学年団についてのアンケート結果からは、生徒情報の共有、諸問題への学年団としての対応、学年団への相談、学年団としての機能の項目は昨年同様高めの値を示し、学年団組織の定着の方向が出てきた。 特に生徒情報の共有化については、90.5%と過去最高の値を示した。(○) 今後は学年団と各分掌や各科との有効な連携体制の構築が大きな課題である。 イ・HR施設、確認を全職員で行う体制を構築できた。校務分担の公平化など、大きな課題が未処理である。(○) ・セクハラ等の問題行動、衛生管理を伴う商品管理、問題発言等による人権侵害など教員の服務についての意識改革、向上を図りたい。</p>
---------------------------------	--	--	--	---